

## “ 杉山代表の ひとこと ”

# 認知症の人の 「徘徊」の理解と対応法

警察庁の発表では、2019年の1年間で認知症が原因で行方不明になった人は1万7,479人、うち死亡が確認された人が460人でした。認知症の人の「徘徊」は介護における深刻な問題の一つであるといえます。

医学・介護・行政などでは「徘徊」と表現されていますが、その言葉から連想されるような「あてもなくさまようこと」ではありません。「認知症の人にとっては目的を持った行動だが、認知機能低下のため合理的な結果をもたらさない行動である」と考えるべきです。「家に帰る」「会社に行く」「子供を迎えに行く」「買い物に行く」「怖いところから逃げる」「散歩に行く」など、認知症の人の行動には原則として目的があります。しかし、認知機能低下のため、途中で道を間違えたり、目的が分からなくなったり、頭に描いている印象と現実とが一致しないため混乱してしまって、「徘徊」し始めるのです。

注意しなければならないことは、奇異な服装(パジャマ姿やちぐはぐな履物)でなく、徘徊ネームなどのシグナルを付けていないときには、周囲の人はその人を徘徊している人と気づくことはありません。異常な言動をしていたり、裸足で歩いていたたり、衣服が非常に乱れる状態になって、やっと「おかしい」と認められるのです。

最初の「徘徊」は予知なく「ある日、突然起こる」ものです。起こることを前提として、携帯電話をGPS対応にする、持ち物に連絡先を書き入れる、近所の人に理解と協力をお願いするなどの予防的対応をしておく、いざという時に慌てないで済みます。

「徘徊」を経験した介護者は、再び「徘徊」するのを心配するあまり、認知症の人を監視したり、行動を抑制したりしがちです。すると、「自分はいつも監視されている」「ここには怖い人ばかりがいる。自分の家

ではない。早く家に帰りたい」「変な人が追いかけてくる。逃げなければ…」と認知症の人が考えて、「徘徊」がひどくなることがあります。

原因・背景を考えて、本人が安心できるように対応することで、「ここは私がいてもよいところだ」「周りの人は、自分を受け入れてくれる優しい人だ」「もう少しここにいてもいい気がする」「怖いところではない」などと認知症の人が感じられると、「徘徊」が軽くなることも少なくありません。

認知症の人と家族の会神奈川県支部が開催しているつどいでは、「徘徊」を経験した介護者の苦労や工夫、制度や機器の利用などが話題になります。

おすすめは、「徘徊」に対しては、制度やさまざまな機器を積極的に利用しよう!」です。

- \* SOSネットワークへの登録:役所の窓口で登録しておくで安心です
- \* 連絡先を記入した用紙・ペンダントを、本人のプライドを尊重しながら持たせる(ペンダントをプレゼントする)
- \* 携帯電話のGPS対応や、お守り袋に入れたり靴に装着する端末も開発されています。また電池寿命が1か月もある「あんしんウォッチャー」などの商品も開発されています
- \* ドアの鍵を簡単に開けられないタイプの鍵(いろいろな種類がある)に取り換える
- \* 室内や室外への移動防止のために人感センサーを設置する

10数年前と違って現在では、さまざまな機器が開発され、利用しやすいソフト(システム)が利用できるようになりました。積極的に利用しましょう。



編集委員  
小林俊一・山下・  
小林裕子・石毛・伊藤

記録的猛暑の夏が終わり、朝夕の寒さが身に染みる時節になりました。コロナの規制も緩和されて、少しずつ日常が戻り始めましたが、インフルエンザ、第8波が心配されます。今年は厳しい冬の訪れが早いと聞きます。皆様、お身体を大切に過ごしてください。  
(山下)

デザイン: PULL/PUSH (片岡修一)